香川大学小児科専門研修プログラム

目次

1. 香川大学小児科専門研修プログラムの概要
2. 小児科専門研修はどのようにおこなわれるのか
3. 専攻医の到達目標

３−１　修得すべき知識・技能・態度など）

３−２　各種カンファレンスなどによる知識・技能の習得

３−３　学問的姿勢

３−４　医師に必要なコアコンピテンシー、倫理性、社会性

1. 施設群による研修プログラムと地域医療についての考え方

４−１　年次毎の研修計画

４−２　研修施設群と研修プログラム

４−３　地域医療について

1. 専門研修の評価
2. 修了判定
3. 専門研修管理委員会
4. １　専門研修管理委員会の業務

７−２　専攻医の就業環境

７−３　専門研修プログラムの改善

７−４　専攻医の採用と修了

７−５　小児科研修の休止・中断、プログラム移動、プログラム外研修の条件

７−６　研修に対するサイトビジット（訪問調査）

1. 専門研修実績記録システム、マニュアル等
2. 専門研修指導医
3. サブスペシャルティ領域との連続性

香川大学小児科専門研修プログラム

1. 香川大学小児科研修プログラムの概要

[整備基準：1, 2, 3, 30]

　小児科医は成長、発達の過程にある小児の診療のため、正常小児の成長・発達に関する知識が不可欠で、新生児期から思春期まで幅広い知識と、発達段階によって疾患内容が異なるという知識が必要です。さらに小児科医はgeneral physicianとしての能力が求められ、そのために、小児科医として必須の疾患をもれなく経験し、疾患の知識とチーム医療・問題対応能力・安全管理能力を獲得し、家族への説明と同意を得る技能を身につける必要があります。

　本プログラムでは、「小児医療の水準向上・進歩発展を図り、小児の健康増進および福祉の充実に寄与する優れた小児科専門医を育成する」ことを目的とし、一定の専門領域に偏ることなく、幅広く研修します。専攻医は「小児科医は子どもの総合医である」という基本的姿勢に基づいて３年間の研修を行い、「子どもの総合診療医」「育児・健康支援者」「子どもの代弁者」「学識・研究者」「医療のプロフェッショナル」の５つの資質を備えた小児科専門医となることを目指してください。

　専門研修１年目は香川大学附属病院で新生児疾患、感染性疾患・内分泌代謝疾患・血液腫瘍疾患・アレルギー疾患・呼吸器疾患・消化器疾患・腎泌尿器疾患・循環器疾患・神経疾患などを担当医として研修します。２年目は研修連携施設、３年目は研修施設又は香川大学附属病院それぞれの施設で担当医として研修し、３年ですべての領域を総合的に研修します。３年間を通じ、外来での乳児健康診査と予防接種などの小児保健・社会医学の研修と救急疾患の対応も担当医として研修します。

当科は大学病院としての高度な専門医療に対応するため、各専門領域に経験豊富な専門医を有し、さらに、１次から３次までの救急患者を受け入れる体制も有しているため、小児科医として欠くことのできない救急疾患の対応、急性疾患の管理も研修できる施設です。さらに、全県にわたる関連施設で急性疾患の対応と慢性疾患の初期および慢性期の対応を経験でき、地域の特性と病院の役割に応じて、すべての領域にわたり、もれなく経験できる体制です。

1. 小児科専門研修はどのように行われるか 　[整備基準:13-16, 30]

　３年間の小児科専門研修では、日本小児科学会が定めた「小児科医の到達目標」のレベルＡの臨床能力の獲得をめざして研修を行います。到達度の自己評価と指導医からのアドバイスを受けるために、「小児科専門研修手帳」を常に携帯し、定期的に振り返りながら研修を進めてください。

1. 臨床現場での学習：外来、病棟、健診などで、到達目標に記載されたレベルAの臨床経験を積むことが基本となります。経験した症例は、指導医からフィードバック・アドバイスを受けながら、診療録の記載、サマリーレポートの作成、臨床研修手帳への記載（ふりかえりと指導医からのフィードバック）、臨床カンファレンス、抄読会（ジャーナルクラブ）、CPCでの発表などを経て、知識、臨床能力を定着させてゆきます。
   * 「小児科専門医の役割」に関する学習：日本小児科学会が定めた小児科専門医の役割を３年間で身につけるようにしてください（次項参照、研修手帳に記録）。
   * 「経験すべき症候」に関する学習：日本小児科学会が定めた経験すべき33症候のうち8割以上（27症候以上）を経験するようにしてください（次項参照、研修手帳に記録）。
   * 「経験すべき疾患」に関する学習：日本小児科学会が定めた経験すべき109疾患のうち8割以上（88疾患以上）を経験するようにしてください（研修手帳参照、記録）。
   * 「習得すべき診療技能と手技」に関する学習：日本小児科学会が定めた経験すべき54技能のうち、8割以上（44技能以上）を経験するようにしてください（研修手帳に記録）。

＜香川大学小児科専門研修プログラムの年間スケジュール＞

＜当研修プログラムの週間スケジュール（香川大学附属病院）＞

1. 臨床現場を離れた学習：以下の学習機会を利用して、到達目標達成の助けとしてください。

(1) 日本小児科学会学術集会、分科会主催の学会、地方会、研究会、セミナー、講習会等への参加

(2) 小児科学会主催の「小児科専門医取得のためのインテンシブコース」（1泊2日）：到達目標に記載された24領域に関するポイントを3年間で網羅して学習できるセミナー

(3)　学会等での症例発表

(4) 日本小児科学会オンラインセミナー：医療安全、感染対策、医療倫理，医療者教育など

(5) 日本小児科学会雑誌等の定期購読および症例報告等の投稿

(6) 論文執筆：専門医取得のためには、小児科に関する論文を査読制度のある雑誌に1つ報告しなければなりません。論文執筆には１年以上の準備を要しますので、指導医の助言を受けながら、早めに論文テーマを決定し、論文執筆の準備を始めてください。

1. 自己学習：到達目標と研修手帳に記載されている小児疾患、病態、手技などの項目を自己評価しながら、不足した分野・疾患については自己学習を進めてください。
2. 大学院進学：専門研修期間中、小児科学の大学院進学は可能ですが、専門研修に支障が出ないように、プログラム・研修施設について事前相談します。小児科臨床に従事しながら臨床研究を進めるのであればその期間は専門研修として扱われますが、研究内容によっては専門研修が延長になる場合もあります。
3. サブスペシャルティ研修：10を参照してください。
4. 専攻医の到達目標

３−１．（習得すべき知識・技能・研修・態度など） 　[整備基準：4, 5, 8-11]

1. 「小児科専門医の役割」に関する到達目標：日本小児科学会が定めた小児科専門医としての役割を３年間で身につけるようにしてください（研修手帳に記録してください）。

これらは６項で述べるコア・コンピテンシーと同義です。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 役割 | | １  年  目 | ２  年  目 | 修  了  時 |
| 子どもの  総合診療  医 | 子どもの総合診療   * 子どもの身体, 心理, 発育に関し、時間的・空間的に全体像を把握できる. * 子どもの疾病を生物学的,心理社会的背景を含めて診察できる. * EBMとNarrative-based Medicineを考慮した診療ができる. |  |  |  |
| 成育医療   * 小児期だけにとどまらず, 思春期・成人期も見据えた医療を実践できる. * 次世代まで見据えた医療を実践できる. |  |  |  |
| 小児救急医療   * 小児救急患者の重症度・緊急度を判断し, 適切な対応ができる * 小児救急の現場における保護者の不安に配慮ができる. |  |  |  |
| 地域医療と社会資源の活用   * 地域の一次から二次までの小児医療を担う. * 小児医療の法律・制度・社会資源に精通し, 適切な地域医療を提供できる. * 小児保健の地域計画に参加し, 小児科に関わる専門職育成に関与できる. |  |  |  |
| 患者・家族との信頼関係   * 多様な考えや背景を持つ小児患者と家族に対して信頼関係構築できる. * 家族全体の心理社会的因子に配慮し, 支援できる. |  |  |  |
| 育児・健康支援者 | プライマリ・ケアと育児支援   * Common diseasesなど, 日常よくある子どもの健康問題に対応できる. * 家族の不安を把握し, 適切な育児支援ができる. |  |  |  |
| 健康支援と予防医療   * 乳幼児・学童・思春期を通して健康支援・予防医療を実践できる. |  |  |  |
| 子どもの代弁者 | アドヴォカシー（advocacy）   * 子どもに関する社会的な問題を認識できる. * 子どもや家族の代弁者として問題解決にあたることができる. |  |  |  |
| 学識・  研究者 | 高次医療と病態研究   * 最新の医学情報を常に収集し,現状の医療を検証できる. * 高次医療を経験し, 病態・診断・治療法の研究に積極的に参画する. |  |  |  |
| 国際的視野   * 国際的な視野を持って小児医療に関わることができる. * 国際的な情報発信・国際貢献に積極的に関わる. |  |  |  |
| 医療のプロフェッショナル | 医の倫理   * 子どもを一つの人格として捉え、年齢・発達段階に合わせた説明・告知と同意を得ることができる. * 患者のプライバシーに配慮し、小児科医としての社会的・職業的責任と医の倫理に沿って職務を全うできる. |  |  |  |
| 省察と研鑽   * 他者からの評価を謙虚に受け止め, 生涯自己省察と自己研鑽に努める. |  |  |  |
| 教育への貢献   * 小児医療に関わるロールモデルとなり, 後進の教育に貢献できる. * 社会に対して小児医療に関する啓発的・教育的取り組みができる. |  |  |  |
| 協働医療   * 小児医療にかかわる多くの専門職と協力してチーム医療を実践できる. |  |  |  |
| 医療安全   * 小児医療における安全管理・感染管理の適切なマネジメントができる. |  |  |  |
| 医療経済   * 医療経済・保険制度・社会資源を考慮しつつ, 適切な医療を実践できる. |  |  |  |

1. 「経験すべき症候」に関する到達目標：日本小児科学会が定めた経験すべき33症候のうち8割以上（27症候以上）を経験するようにしてください（研修手帳に記録して下さい）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 症候 | １年目 | ２年目 | 修了時 |
| 体温の異常 | | | |
| 発熱，不明熱，低体温 |  |  |  |
| 疼痛 | | | |
| 頭痛 |  |  |  |
| 胸痛 |  |  |  |
| 腹痛（急性，反復性） |  |  |  |
| 背・腰痛，四肢痛，関節痛 |  |  |  |
| 全身的症候 | | | |
| 泣き止まない，睡眠の異常 |  |  |  |
| 発熱しやすい，かぜをひきやすい |  |  |  |
| だるい，疲れやすい |  |  |  |
| めまい，たちくらみ，顔色不良，気持ちが悪い |  |  |  |
| ぐったりしている，脱水 |  |  |  |
| 食欲がない，食が細い |  |  |  |
| 浮腫，黄疸 |  |  |  |
| 成長の異常 | | | |
| やせ，体重増加不良 |  |  |  |
| 肥満，低身長，性成熟異常 |  |  |  |
| 外表奇形・形態異常 | | | |
| 顔貌の異常，唇・口腔の発生異常，鼠径ヘルニア，臍ヘルニア，股関節の異常 |  |  |  |
| 皮膚，爪の異常 | | | |
| 発疹，湿疹，皮膚のびらん，蕁麻疹，浮腫，母斑，膿瘍，皮下の腫瘤，乳腺の異常，爪の異常，発毛の異常，紫斑 |  |  |  |
| 頭頸部の異常 | | | |
| 大頭，小頭，大泉門の異常 |  |  |  |
| 頸部の腫脹，耳介周囲の腫脹，リンパ節腫大，耳痛，結膜充血 |  |  |  |
| 消化器症状 | | | |
| 嘔吐，吐血，下痢，下血，血便，便秘，口内のただれ，裂肛 |  |  |  |
| 腹部膨満，肝腫大，腹部腫瘤 |  |  |  |
| 呼吸器症状 | | | |
| 咳，嗄声，喀痰，喘鳴，呼吸困難，陥没呼吸，呼吸不整，多呼吸 |  |  |  |
| 鼻閉，鼻汁，咽頭痛，扁桃肥大，いびき |  |  |  |
| 循環器症状 | | | |
| 心雑音，脈拍の異常，チアノーゼ，血圧の異常 |  |  |  |
| 血液の異常 | | | |
| 貧血，鼻出血，出血傾向，脾腫 |  |  |  |
| 泌尿生殖器の異常 | | | |
| 排尿痛，頻尿，乏尿，失禁，多飲，多尿，血尿，陰嚢腫大，外性器の異常 |  |  |  |
| 神経・筋症状 | | | |
| けいれん，意識障害 |  |  |  |
| 歩行異常，不随意運動，麻痺，筋力が弱い，体が柔らかい, floppy infant |  |  |  |
| 発達の間題 | | | |
| 発達の遅れ，落ち着きがない，言葉が遅い，構音障害（吃音），学習困難 |  |  |  |
| 行動の間題 | | | |
| 夜尿，遺糞 |  |  |  |
| 泣き入りひきつけ，夜泣き，夜驚，指しゃぶり，自慰，チック |  |  |  |
| うつ，不登校，虐待，家庭の危機 |  |  |  |
| 事故，傷害 | | | |
| 溺水，管腔異物，誤飲，誤嚥，熱傷，虫刺 |  |  |  |
| 臨死，死 | | | |
| 臨死、死 |  |  |  |

1. 「経験すべき疾患」に関する到達目標：日本小児科学会が定めた経験すべき109疾患のうち、8割以上（88疾患以上）を経験するようにしてください（研修手帳に記録してください）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 新生児疾患，先天異常 | 感染症 | 循環器疾患 | 精神・行動・心身医学 |
| 低出生体重児 | 麻疹, 風疹 | 先天性心疾患 | 心身症，心身医学的問題 |
| 新生児黄疸 | 単純ヘルペス感染症 | 川崎病の冠動脈障害 | 夜尿 |
| 呼吸窮迫症候群 | 水痘・帯状疱疹 | 房室ブロック | 心因性頻尿 |
| 新生児仮死 | 伝染性単核球症 | 頻拍発作 | 発達遅滞，言語発達遅滞 |
| 新生児の感染症 | 突発性発疹 | 血液，腫瘍 | 自閉症スペクトラム |
| マス・スクリーニング | 伝染性紅斑 | 鉄欠乏性貧血 | AD/HD |
| 先天異常，染色体異常症 | 手足口病、ヘルパンギーナ | 血小板減少 | 救急 |
| 先天代謝，代謝性疾患 | インフルエンザ | 白血病，リンパ腫 | けいれん発作 |
| 先天代謝異常症 | アデノウイルス感染症 | 小児がん | 喘息発作 |
| 代謝性疾患 | 溶連菌感染症 | 腎・泌尿器 | ショック |
| 内分泌 | 感染性胃腸炎 | 急性糸球体腎炎 | 急性心不全 |
| 低身長，成長障害 | 血便を呈する細菌性腸炎 | ネフローゼ症候群 | 脱水症 |
| 単純性肥満，症候性肥満 | 尿路感染症 | 慢性腎炎 | 急性腹症 |
| 性早熟症，思春期早発症 | 皮膚感染症 | 尿細管機能異常症 | 急性腎不全 |
| 糖尿病 | マイコプラズマ感染症 | 尿路奇形 | 虐待，ネグレクト |
| 生体防御，免疫 | クラミジア感染症 | 生殖器 | 乳児突然死症候群 |
| 免疫不全症 | 百日咳 | 亀頭包皮炎 | 来院時心肺停止 |
| 免疫異常症 | ＲＳウイルス感染症 | 外陰膣炎 | 溺水，外傷，熱傷 |
| 膠原病，リウマチ性疾患 | 肺炎 | 陰嚢水腫，精索水腫 | 異物誤飲・誤嚥，中毒 |
| 若年性特発性関節炎 | 急性中耳炎 | 停留精巣 | 思春期 |
| SLE | 髄膜炎（化膿性，無菌性） | 包茎 | 過敏性腸症候群 |
| 川崎病 | 敗血症，菌血症 | 神経・筋疾患 | 起立性調節障害 |
| 血管性紫斑病 | 真菌感染症 | 熱性けいれん | 性感染，性感染症 |
| 多型滲出性紅斑症候群 | 呼吸器 | てんかん | 月経の異常 |
| アレルギー疾患 | クループ症候群 | 顔面神経麻痺 | 関連領域 |
| 気管支喘息 | 細気管支炎 | 脳炎，脳症 | 虫垂炎 |
| アレルギー性鼻炎・結膜炎 | 気道異物 | 脳性麻痺 | 鼠径ヘルニア |
| アトピー性皮膚炎 | 消化器 | 高次脳機能障害 | 肘内障 |
| 蕁麻疹，血管性浮腫 | 腸重積 | 筋ジストロフィー | 先天性股関節脱臼 |
| 食物アレルギー | 反復性腹痛 |  | 母斑，血管腫 |
| アナフィラキシー | 肝機能障害 |  | 扁桃，アデノイド肥大 |
|  |  |  | 鼻出血 |

1. 「習得すべき診療技能と手技」に関する到達目標：日本小児科学会が定めた経験すべき54技能のうち、8割以上（44技能以上）を経験するようにしてください（研修手帳に記録してください）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 身体計測 | | 採 尿 | けいれん重積の処置と治療 |
| 皮脂厚測定 | | 導 尿 | 末梢血液検査 |
| バイタルサイン | | 腰椎穿刺 | 尿一般検査、生化学検査、蓄尿 |
| 小奇形・形態異常の評価 | | 骨髄穿刺 | 便一般検査 |
| 前弯試験 | | 浣 腸 | 髄液一般検査 |
| 透光試験（陰嚢，脳室） | | 高圧浣腸（腸重積整復術） | 細菌培養検査、塗抹染色 |
| 眼底検査 | | エアゾール吸入 | 血液ガス分析 |
| 鼓膜検査 | | 酸素吸入 | 血糖・ビリルビン簡易測定 |
| 鼻腔検査 | | 臍肉芽の処置 | 心電図検査（手技） |
| 注射法 | 静脈内注射 | 鼠径ヘルニアの還納 | Ｘ線単純撮影 |
| 筋肉内注射 | 小外傷，膿瘍の外科処置 | 消化管造影 |
| 皮下注射 | 肘内障の整復 | 静脈性腎盂造影 |
| 皮内注射 | 輸血 | CT検査 |
| 採血法 | 毛細管採血 | 胃洗浄 | MRI検査 |
| 静脈血採血 | 経管栄養法 | 排泄性膀胱尿道造影 |
| 動脈血採血 | 簡易静脈圧測定 | 腹部超音波検査 |
| 静脈路  確保 | 新生児 | 光療法 |  |
| 乳児 | 心肺蘇生 |  |
| 幼児 | 消毒・滅菌法 |  |

３−２．各種カンファレンスなどによる知識・技能の習得　[整備基準:13]

　当プログラムでは様々な知識・技能の習得機会（教育的行事）を設けています。

* カンファレンスは各プログラムで柔軟に構築して結構ですが、日本小児科学会の到達目標に準拠してください。

1. 朝カンファレンス（毎朝）：患者申し送りを行い、指導医からフィードバックを受け、指摘された課題について学習を進める。
2. 総回診（毎週２回）：受持患者について教授をはじめとした指導医陣に報告してフィードバックを受ける。受持以外の症例についても見識を深める。
3. 症例検討会（不定期）：診断・治療困難例、臨床研究症例などについて専攻医が報告し、指導医からのフィードバック、質疑などを行う。
4. レクチャー（毎週）：臨床トピックについてミニレクチャー、専門家のレクチャーを受け、質疑を行う。
5. ＣＰＣ：死亡・剖検例、難病･稀少症例についての病理診断を検討する。
6. 周産期カンファレンス（毎週）：周産期科女性診療科や小児科、関連診療科と合同で、早産児、新生児手術症例、先天異常、死亡例などの症例検討を行い、臨床倫理など小児科専門医のプロフェッショナリズムについても学ぶ。
7. 抄読会・研究報告会（毎週）：受持症例等に関する論文概要を口頭説明し､意見交換を行う。研究報告会では講座で行われている研究について討論を行い、学識を深め、国際性や医師の社会的責任について学ぶ。
8. 合同勉強会（年2回）：当プログラムに参加するすべての専攻医が一同に会し、勉強会を行う。多施設にいる専攻医と指導医の交流を図る。
9. ふりかえり（年２回）：毎専攻医と指導医が１対１またはグループで集まり、研修をふりかえる。研修上の問題点や悩み、研修（就業）環境、研修の進め方、キャリア形成などについてインフォーマルな雰囲気で話し合いを行う。
10. 学生・初期研修医に対する指導：病棟や外来で医学生･初期研修医を指導する。後輩を指導することは、自分の知識を整理・確認することにつながることから、当プログラムでは、専攻医の重要な取組と位置づけている。

３−３．学問的姿勢　[整備基準：6, 12, 30]

　当プログラムでは、３年間の研修を通じて科学的思考、生涯学習の姿勢、研究への関心などの学問的姿勢も学んでいきます。

1. 受持患者などについて、常に最新の医学情報を吸収し、診断・治療に反映できる。
2. 高次医療を経験し、病態・診断・治療法の臨床研究に協力する。
3. 国際的な視野を持って小児医療を行い、国際的な情報発信・貢献に協力する。
4. 指導医などからの評価を謙虚に受け止め、ふりかえりと生涯学習ができるようにする。

　また、小児科専門医資格を受験するためには、査読制度のある雑誌に小児科に関連する筆頭論文１編を発表していることが求められます。論文執筆には１年以上の準備を要しますので、研修２年目のうちに指導医の助言を受けながら、論文テーマを決定し、投稿の準備を始めることが望まれます。

３−４．医師に必要なコアコンピテンシー、倫理性、社会性　[整備基準：7]

　コアコンピテンシーとは医師としての中核的な能力あるいは姿勢のことで、第３項の「小児科専門医の役割」に関する到達目標が、これに該当します。特に「医療のプロフェッショナル」は小児科専門医としての倫理性や社会性に焦点を当てています。

1. 子どもを一個の人格として捉え、年齢・発達段階に合わせた説明・告知と同意を得ることができる。
2. 患者のプライバシーに配慮し、小児科医としての社会的・職業的責任と医の倫理に沿って職務を全うできる。
3. 小児医療に関わるロールモデルとなり、後進の教育に貢献できる。
4. 社会に対して小児医療に関する啓発的・教育的取り組みができる。
5. 小児医療に関わる多くの専門職と協力してチーム医療を実践できる。
6. 小児医療の現場における安全管理・ 感染管理に対して適切なマネジメントができる。
7. 医療経済・社会保険制度・社会的資源を考慮しつつ、適切な医療を実践できる。

４．研修施設群による研修プログラムと地域医療についての考え方

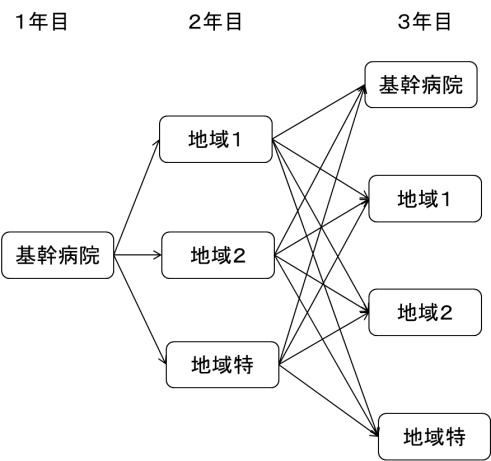
４−１　年次毎の研修計画　　　　　　　　　　　　[整備基準：16, 25, 31]

　日本小児科学会では研修年次毎の達成度（マイルストーン）を定めています（下表）。小児科専門研修においては広範な領域をローテーションしながら研修するため、研修途中においてはマイルストーンの達成度は専攻医ごとに異なっていて構いませんが、研修修了時点で一定レベルに達していることが望まれます。「小児科専門医の役割（１６項目）」の各項目に関するマイルストーンについては研修マニュアルを参照してください。研修３年次はチーフレジデントとして専攻医全体のとりまとめ、後輩の指導、研修プログラムへの積極的関与など、責任者としての役割が期待されます。

|  |  |
| --- | --- |
| 1年次 | 健康な子どもと家族、common disease、小児保健・医療制度の理解  基本的診療技能（面接、診察、手技）、健康診査法の修得  小児科総合医、育児・健康支援者としての役割を自覚する |
| ２年次 | 病児と家族、重症疾患・救急疾患の理解  診療技能に習熟し、重症疾患・救急疾患に的確に対応できる  小児科総合医としての実践力を高める、後輩の指導 |
| ３年次  （チーフレジデント） | 高度先進医療、希少難病、障がい児に関する理解と技能の修得  子どもの代弁者、学識者、プロフェッショナルとしての実践  専攻医とりまとめ、後輩指導、研修プログラムへの積極的関与 |

４−２　研修施設群と研修モデル　　　　　　　　[整備基準：23 - 37]

　小児科専門研修プログラムは３年間（３６か月間）と定められています。本プログラムにおける研修施設群と、年次毎の研修モデルは下表のとおりです。



1.基幹病院：香川大学附属病院

2.地域1（県が医療圏で不足していると考えている地域）：三豊総合病院、さぬき市民病院、内海病院、井下病院、白鳥病院

3.地域2：香川県立中央病院、坂出市民病院、香川県済生会病院、りつりん病院、香川総合リハビリテーション病院、松原病院、屋島総合病院

4.地域特（総合周産期母子医療センターの新生児循環器疾患を主に対象とする研修）：四国おとなとこどもの医療センター、岡山医療センター、東京都立小児総合医療センター

専門分野番号



＜領域別の研修目標＞





４−３　地域医療の考え方　　　　　　　　　　[整備基準：25, 26, 28, 29]

　当プログラムは香川大学附属病院小児科を基幹施設とし、主に香川県の医療圏の小児医療を支えるものであり、地域医療に十分配慮したものです。３年間の研修期間のうち最低１年間県下の地域救急医療と医療全般を経験するようにプログラムされています。地域医療においては、小児科専門医の到達目標分野２４「地域小児総合医療」（下記）を参照して、地域医療に関する能力を研鑽してください。

＜地域小児総合医療の具体的到達目標＞

|  |
| --- |
| 1. 子どもの疾病・傷害の予防, 早期発見, 基本的な治療ができる.    1. 子どもや養育者とのコミュニケーションを図り, 信頼関係を構築できる.    2. 予防接種について, 養育者に接種計画, 効果, 副反応を説明し, 適切に実施する. 副反応・事故が生じた場合には適切に対処できる. 2. 子どもをとりまく家族・園・学校など環境の把握ができる. 3. 養育者の経済的・精神的な育児困難がないかを見極め, 虐待を念頭に置いた対応ができる. 4. 子どもや養育者から的確な情報収集ができる. 5. Common diseaseの診断や治療, ホームケアについて本人と養育者に分かりやすく説明できる. 6. 重症度や緊急度を判断し,初期対応と, 適切な医療機関への紹介ができる. 7. 稀少疾患・専門性の高い疾患を想起し, 専門医へ紹介できる. 8. 乳幼児健康診査・育児相談を実施できる.    1. 成長・発達障害, 視・聴覚異常, 行動異常, 虐待等を疑うことができる.    2. 養育者の育児不安を受け止めることができる.    3. 基本的な育児相談, 栄養指導, 生活指導ができる. 9. 地域の医療・保健・福祉・行政の専門職，スタッフとコミュニケーションをとり協働できる. 10. 地域の連携機関の概要を知り, 医療・保健・福祉・行政の専門職と連携し, 小児の育ちを支える適切な対応ができる. |

５. 専門研修の評価　　　　　　　　　　　　[整備基準：17-22]

　専門研修を有益なものとし、到達目標達成を促すために、当プログラムでは指導医が専攻医に対して様々な形成的評価（アドバイス、フィードバック）を行います。専攻医自身も常に自己評価を行うことが重要です（振り返りの習慣、研修手帳の記載など）。毎年２回、各専攻医の研修の進捗状況をチェックし、３年間の研修修了時には目標達成度を総括的に評価し､研修修了認定を行います。指導医は、卒後7年以上の小児科専門医又は小児科認定指導医です。

1. 指導医による形成的評価

* 日々の診療において専攻医を指導し、アドバイス・フィードバックを行う。
* 毎週の教育的行事（回診、カンファレンス等）で、専攻医のプレゼンなどに対してアドバイス・フィードバックを行う。
* 毎月１回の「ふりかえり」では、専攻医と指導医が１対１またはグループで集まり、研修をふりかえり、研修上の問題点や悩み、研修の進め方、キャリア形成などについて非公式の話し合いが持たれ、指導医からアドバイスを行う。
* 毎年２回、専攻医の診療を観察し､記録・評価して専攻医にフィードバックする（Mini-CEX）。
* 毎年２回、研修手帳のチェックを受ける。

1. 専攻医による自己評価

* 日々の診療・教育的行事において指導医から受けたアドバイス・フィードバックに基づき､ふりかえりを行う。
* 毎月１回の「ふりかえり」では、指導医とともに１か月間の研修をふりかえり、研修上の問題点や悩み、研修の進め方、キャリア形成などについて考える機会を持つ。
* 毎年２回、Mini-CEXによる評価を受け、その際、自己評価も行う。
* 毎年２回、研修手帳の記載を行い、自己評価とふりかえりを行う。

1. 総括的評価

* 毎年１回、年度末に研修病院での360度評価を受ける（指導医、医療スタッフなど多職種）。
* 3年間の総合的な修了判定は研修管理委員会が行います。修了認定されると小児科専門医試験の申請を行うことができます。

６．修了判定　　　　　　　　　　　　　　[整備基準：21, 22, 53]

1. 評価項目：(1) 小児科医として必須の知識および問題解決能力、(2) 小児科専門医としての適切なコミュニケーション能力および態度について、指導医・同僚専攻医・看護師等の評価に基づき、研修管理委員会で修了判定を行います。
2. 評価基準と時期
3. の評価：簡易診療能力評価 Mini-CEX (Mini-Clinical Evaluation Exercise)を参考にします。指導医は専攻医の診療を10分程度観察して研修手帳に記録し、その後専攻医と5〜10分程度振り返ります。評価項目は、病歴聴取、診察、コミュニケーション（態度）、臨床判断、プロフェッショナリズム、まとめる力・能率、総合的評価の7項目です。毎年2回（10月頃と3月頃）、3年間の専門研修期間中に合計6回行います。
4. の評価：360度評価を参考にします。専門研修プログラム統括責任者、連携施設の専門研修担当者、指導医、小児科看護師、同時期に研修した専攻医などが、①総合診療能力、②育児支援の姿勢、③代弁する姿勢、④学識獲得の努力、⑤プロフェッショナルとしての態度について、概略的な360度評価を行います。
5. 総括判定：研修管理委員会が上記のMini-CEX, 360度評価を参考に、研修手帳の記載、症例サマリー､診療活動・学術活動などを総合的に評価して、修了判定します。研修修了判定がおりないと、小児科専門医試験を受験できません。
6. 「妊娠・出産、産前後に伴う研修期間の休止」、「疾病での休止」、「短時間雇用形態での研修」、「専門研修プログラムを移動する場合」、「その他一時的にプログラムを中断する場合」に相当する場合は、その都度、諸事情および研修期間等を考慮して判定を行います。

＜専門医が専門研修プログラムの修了に向けて行うべきこと＞

　プログラム修了認定、小児科専門医試験の受験のためには，以下の条件が満たされなければなりません。チェックリストとして利用して下さい。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 1 |  | 「小児科専門医の役割」に関する目標達成（研修手帳） |
| 2 |  | 「経験すべき症候」に関する目標達成（研修手帳） |
| 3 |  | 「経験すべき疾患」に関する目標達成（研修手帳） |
| 4 |  | 「習得すべき診療技能と手技」に関する目標達成（研修手帳） |
| 5 |  | Mini-CEXによる評価（年２回、合計６回、研修手帳） |
| 6 |  | 360度評価（年１回、合計３回） |
| 7 |  | 30症例のサマリー（領域別指定疾患を含むこと） |
| 8 |  | 講習会受講：医療安全、医療倫理、感染防止など |
| 9 |  | 筆頭論文１編の執筆（小児科関連論文、査読制度のある雑誌掲載） |

７. 専門研修プログラム管理委員会

７−１　専門研修プログラム管理委員会の業務　　　　[整備基準：35〜39]

　本プログラムでは、基幹施設である香川大学小児科に、基幹施設の研修担当委員および各連携施設での責任者から構成され、専門研修プログラムを総合的に管理運営する「専門研修プログラム管理委員会」を、また連携施設には「専門研修連携施設プログラム担当者」を置いています。プログラム統括責任者は研修プログラム管理委員会を定期的に開催し、以下の１）〜１０）の役割と権限を担います。専門研修プログラム管理委員会の構成メンバーは、医師、看護師などの多種職からなります。

＜研修プログラム管理委員会の業務＞

1. 研修カリキュラムの作成・運用・評価
2. 個々の専攻医に対する研修計画の立案
3. 研修の進捗状況の把握（年度毎の評価）
4. 研修修了認定（専門医試験受験資格の判定）
5. 研修施設・環境の整備
6. 指導体制の整備（指導医FDの推進）
7. 学会・専門医機構との連携、情報収集
8. 専攻医受け入れ人数などの決定
9. 専門研修を開始した専攻医の把握と登録
10. サイトビジットへの対応

７−２　専攻医の就業環境（統括責任者、研修施設管理者）　[整備基準：40]

　本プログラムの統括責任者と研修施設の管理者は、専攻医の勤務環境と健康に対する責任を負い、専攻医のために適切な労働環境の整備を行います。専攻医の心身の健康を配慮し、勤務時間が週80時間を越えないよう、また過重な勤務にならないよう、適切な休日の保証と工夫を行うよう配慮します。当直業務と夜間診療業務の区別と、それぞれに対応した適切な対価の支給を行い、当直あるいは夜間診療業務に対しての適切なバックアップ体制を整備します。研修年次毎に専攻医および指導医は専攻医指導施設に対する評価も行い、そこには労働時間、当直回数、給与など、労働条件についての内容が含まれ、その内容は香川大学小児科専門研修プログラム管理委員会に報告されます。

７−３　専門研修プログラムの改善　　　　　　　　[整備基準：49, 50, 51]

1. 研修プログラム評価（年度毎）：専攻医はプログラム評価表（下記）に記載し、毎年１回（年度末）香川大学研修管理プログラム委員会に提出してください。専攻医からプログラム、指導体制等に対して、いかなる意見があっても、専攻医はそれによる不利益を被ることはありません。

「指導に問題あり」と考えられる指導医に対しては、基幹施設・連携施設のプログラム担当者、あるいは研修管理委員会として対応措置を検討します。問題が大きい場合、専攻医の安全を守る必要がある場合などには、専門医機構の小児科領域研修委員会の協力を得て対応します。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 平成（　　　）年度　香川大学小児科専門研修プログラム評価 | | |
| 専攻医氏名 |  | |
| 研修施設 |  |  |
| 研修環境・待遇 |  |  |
| 経験症例・手技 |  |  |
| 指導体制 |  |  |
| 指導方法 |  |  |
| 自由記載欄 |  |  |

1. 研修プログラム評価（３年間の総括）：３年間の研修修了時には、当プログラム全般について研修カリキュラムの評価を記載し、専門医機構へ提出してください。（小児科臨床研修手帳）

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| ＜研修カリキュラム評価（３年間の総括）＞  Ａ良い　　Ｂやや良い　　Ｃやや不十分　　Ｄ不十分 | | |
| 項　目 | 評価 | コメント |
| 子どもの総合診療 |  |  |
| 成育医療 |  |  |
| 小児救急医療 |  |  |
| 地域医療と社会資源の活用 |  |  |
| 患者・家族との信頼関係 |  |  |
| プライマリ・ケアと育児支援 |  |  |
| 健康支援と予防医療 |  |  |
| アドヴォカシー |  |  |
| 高次医療と病態研究 |  |  |
| 国際的視野 |  |  |
| 医の倫理 |  |  |
| 省察と研鑚 |  |  |
| 教育への貢献 |  |  |
| 協働医療 |  |  |
| 医療安全 |  |  |
| 医療経済 |  |  |
| 総合評価 |  |  |
| 自由記載欄 | | |

1. サイトビジット：専門医機構によるサイトビジット（ピアレビュー、７−６参照）に対しては研修管理委員会が真摯に対応し、専門医の育成プロセスの制度設計と専門医の育成が保証されているかのチェックを受け、プログラムの改善に繋げます。また、専門医機構・日本小児科学会全体としてプログラムの改善に対して責任をもって取り組みます。

７−４　専攻医の採用と修了 　　　　　　　　　　 [整備基準：27, 52, 53]

1. 受け入れ専攻医数：本プログラムでの毎年の専攻医募集人数は、専攻医が３年間の十分な専門研修を行えるように配慮されています。本プログラムの指導医総数は（35.8 ）名（基幹施設13　名、連携施設20.8　名、関連施設2 名）であるが、整備基準で定めた過去３年間の小児科専門医の育成実績（専門医試験合格者数の平均＋5名程度以内）から（　7　）名を受け入れ人数とします。

|  |  |
| --- | --- |
| 受け入れ人数 | （　7　）名 |

1. 採用：専攻医の一次募集は2016年8月中旬～9月末日です。研修プログラムへの応募者は、**2016年9月末日**までにプログラム統括責任者宛に所定の「応募申請書」および履歴書等定められた書類を提出してください。申請書は、香川大学小児科専門研修プログラムのwebsiteよりダウンロードするか、電話あるいはe-mailで問い合わせてください（Tel: 087-891-2171、E-mail: syuonika@med.kagawa-u.ac.jp）。2016年10月1日～中旬に採用試験を行い、専門研修プログラム管理委員会は審査のうえ採否を決定します。採否は2016年10月末日までに文書で本人に通知します。
2. 研修開始届け：研修を開始した専攻医は、各年度の5月31日までに以下の専攻医氏名報告書を、香川大学小児科専門研修プログラム管理委員会(syuonika@med.kagawa-u.ac.jpに提出してください。　専攻医氏名報告書（医籍登録番号・初期研修修了証・専攻医の研修開始年）（様式1）、専攻医履歴書（様式2）を提出して下さい。
3. 修了（６修了判定参照）：毎年１回、研修管理委員会で各専攻医の研修の進捗状況、能力の修得状況を評価し、専門研修３年修了時に、小児科専門医の到達目標にしたがって達成度の総括的評価を行い、修了判定を行います。修了判定は、専門研修プログラム管理委員会の評価に基づき、プログラム統括責任者が行います。「妊娠・出産、産前後に伴う研修期間の休止」、「疾病での休止」、「短時間雇用形態での研修」、「専門研修プログラムを移動する場合」、「その他一時的にプログラムを中断する場合」に相当する場合は、その都度、諸事情および研修期間等を考慮して判定します。

７−５　小児科研修の休止・中断、プログラム移動、プログラム外研修の条件

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　[整備基準：33]

1. 研修の休止・中断期間を除いて3年以上の専門研修を行わなければなりません。勤務形態は問いませんが、専門医研修であることを統括責任者が認めることが絶対条件です（留学などで常勤医としての勤務形態がない期間は専門研修期間としてはカウントされません）
2. 出産育児による研修の休止に関しては、研修休止が6か月までであれば、休止期間以外での規定の症例経験がなされ、診療能力が目標に到達しているとプログラム管理委員会が判断すれば、3年間での専攻医研修修了を認めます。
3. 病気療養による研修休止の場合は、研修休止が３か月までであれば、休止期間以外で規定の症例経験がなされ、診療能力が目標に到達しているとプログラム管理委員会が判断すれば、３年間での専攻医研修修了を認めます。
4. 諸事情により専門医研修プログラムを中断し、プログラムを移動せざるをえない場合には、日本専門医機構内に組織されている小児科領域研修委員会へ報告、相談し、承認された場合には、プログラム統括責任者同士で話し合いを行い、専攻医のプログラム移動を行います。

７−６　研修に対するサイトビジット 　　　　　　　　　[整備基準：51]

　研修プログラムに対する外部からの監査・調査に対して、基幹施設および連携施設の責任者は真摯に対応します。日本専門医機構からのサイトビジットにあたっては、求められた研修関連の資料等を提出し、また、専攻医、指導医、施設関係者へのインタビューに応じ、サイトビジットによりプログラムの改善指導を受けた場合には、専門研修プログラム管理委員会が必要な改善を行います。

８．専門研修実績記録システム、マニュアル等　　　[整備基準：41-48]

　専門研修実績記録システム（様式）、研修マニュアル、指導医マニュアルは別途定めます。

|  |
| --- |
| 研修マニュアル目次   * 序文（研修医・指導医に向けて） * ようこそ小児科へ * 小児科専門医概要 * 研修開始登録（プログラムへの登録） * 小児科医の到達目標の活用　(小児科医の到達目標　改定第６版) * 研修手帳の活用と研修中の評価　(研修手帳　改定第３版) * 小児科医のための医療教育の基本について * 小児科専門医試験告示、出願関係書類一式、症例要約の提出について   第11回（2017年）以降の専門医試験について   * 専門医　新制度について * 参考資料   　　小児科専門医制度に関する規則、施行細則  　　専門医にゅーす　No.8, No.13   * 当院における研修プログラムの概要（モデルプログラム） |

９．専門研修指導医 　　　　　　　　　　　　　　　[整備基準：36]

　指導医は、卒後7年以上の小児科専門医、又は小児科認定指導医（臨床経験10年以上（小児科専門医として5年以上）の経験豊富な小児科専門医で、適切な教育・指導法を習得するために、日本小児科学会が主催する指導医講習会もしくはオンラインセミナーで研修を受け、日本小児科学会から指導医としての認定を受けています）です。

１０．サブスペシャルティ領域との連続性 　　　　　 [整備基準：32]

　現在、小児科に特化したサブスペシャルティ領域としては、小児神経専門医（日本小児神経学会）、小児循環器専門医(日本小児循環器病学会)、小児血液・がん専門医(日本小児血液がん学会)、周産期専門医(新生児) (日本周産期新生児医学会)の４領域があります。

　本プログラムでは、基本領域の専門医資格取得から、サブスペシャルティ領域の専門研修へと連続的な研修が可能となるように配慮します。サブスペシャルティ領域の専門医資格取得の希望がある場合、３年間の専門研修プログラムの変更はできませんが、可能な範囲で専攻医が希望するサブスペシャルティ領域の疾患を経験できるよう、当該サブスペシャルティ領域の指導医と相談しながら研修計画を立案します。ただし、基本領域専門研修中に経験した疾患は、サブスペシャルティ領域の専門医資格申請に使用できない場合があります。

追記

2016/04/28

屋島総合病院が追加となりました.

屋島総合病院は地域2になります

P12

年間入院数650　年間外来数4800　指導員1　分野2,5,8,11,12

　以上